

特集

みなとまち新潟とつながる世界遺産と日本酒と

■RANDOM FOCUS 寄稿

新潟清酒、その現在地と未来
日本酒王国・新潟が紡ぐ文化と挑戦

新潟県酒造組合

■TOP INTERVIEW

トキが舞う佐渡島の新たな魅力を発信
世界遺産へと誘う唯一の航路が描く未来

佐渡汽船株式会社

■BEHIND PROJECT

古より歴史を刻む日本海の拠点港における
“湊まち”から“港湾都市”の変遷と将来像

国土交通省 北陸地方整備局 新潟港湾・空港整備事務所

「佐渡島の金山」からトキまで
佐渡島の魅力を世界に発信する取組

佐渡市 観光文化スポーツ部 世界遺産課

■ZOOM UP

みなとまちに今も生きる
古町芸妓のおもてなし

古町芸妓

■COFFEE BREAK

COCOTURFの挑戦 第1回

協和道路株式会社



特集

みなとまち新潟とつながる世界遺産と日本酒と

今号は歴史あるみなとまち新潟を特集します。新潟県酒造組合の大平会長の「酒どころ新潟」のご寄稿にはじまり、2024年12月の世界遺産登録で改めて注目が集まる「佐渡島の金山」と新潟をつなぐ唯一の航路について佐渡汽船の尾渡社長に、また世界遺産登録に至るお話を佐渡市にご紹介いただきます。そして新潟港の現在をお伝えするとともに、芸妓のまち「古町花街」から、はつ柳紅子さんにご登場いただき、現在も息づく古町芸妓のおもてなしについてご紹介いただきます。



新潟市中央区の「湊稻荷神社」。境内には台座が回る「願掛け高麗犬」がある。男性は正面右、女性は左の高麗犬を、願いを心に念じながら回して所願成就を祈願する

CONTENTS

■ RANDOM FOCUS 寄稿..... 3

新潟清酒、その現在地と未来

日本酒王国・新潟が紡ぐ文化と挑戦

大平 俊治 新潟県酒造組合 会長

■ TOP INTERVIEW..... 8

トキが舞う佐渡島の新たな魅力を発信 世界遺産へと誘う唯一の航路が描く未来

尾渡 英生 佐渡汽船株式会社 代表取締役社長 × 松原 裕 SCOPE 理事長

■ BEHIND PROJECT①..... 12

古より歴史を刻む日本海の拠点港における “湊まち”から“港湾都市”の変遷と将来像

国土交通省 北陸地方整備局 新潟港湾・空港整備事務所

■ BEHIND PROJECT②..... 16

「佐渡島の金山」からトキまで 佐渡島の魅力を世界に発信する取組

佐渡市 観光文化スポーツ部 世界遺産課

■ ZOOM UP..... 20

みなとまちに今も生きる 古町芸妓のおもてなし

はつ柳 紅子 古町芸妓

■ COFFEE BREAK..... 23

COCOTURFの挑戦 第1回 再生ヤシガラとの出会い

東 裕 協和道路株式会社 副社長

新潟清酒、その現在地と未来

日本酒王国・新潟が紡ぐ文化と挑戦

「米どころ新潟」は、また「酒どころ新潟」でもあります。
ここでは、全国一の酒蔵数を誇る新潟の伝統的な酒造りと、その文化の継承、
そして、国内だけではなく海外にも目を向けた新たな挑戦について、
新潟県酒造組合の大平会長にご寄稿いただきました。

1. 全国一の酒蔵数： 多様性が生む「酒の聖地」

新潟県内には、現在91の酒蔵が点在しています。これは全国一の数を誇り、まさに「酒どころ新潟」の象徴といえます。酒造りに最適な冬の冷涼で湿潤な気候のもと、信濃川や阿賀野川といった大河の伏流水、あるいは山々からの雪解け水といった異なる水系があるため、各蔵元は、それぞれのテロワール（風土）を反映した酒造りを行っています。この圧倒的な蔵元数の多さが、互いに切磋琢磨し、高め合う土壌となり、新潟清酒全体の品質を底上げしてきました。

2. 一人当たり消費量日本一： 暮らしに溶け込む日本酒

新潟の酒文化を支えてきた基盤として見逃

せないのが、県民一人当たりの清酒年間消費量が日本一という事実です。2023年の国税庁の資料によれば、新潟県は一人当たり8.1ℓで全国平均3.8ℓの倍以上になっています。当地では、日本酒は祝祭のためだけの特別な存在ではありません。日々の食卓に寄り添い、季節の魚介や発酵食品と共に楽しまれてきた生活文化の一部です。この「日常性」こそが、新潟清酒の品質を内側から磨き続けてきた原動力であるといえるでしょう。



圧倒的な蔵元数を物語る数々の新潟の酒

3. 酒米の父子鷹： 五百万石と越淡麗

酒造りの根幹を成す酒米においても、米どころ新潟は大きな存在感を示しています。「五百万石」は新潟で誕生し、軽快で雑味の少ない酒質を生む酒米として全国に普及しました。さらに20年前からは、新潟独自の酒造適性を追求した「越淡麗」が登場しています。これは「五百万石」と「山田錦」の長所を併せ持つ米であり、より膨らみのある味わいの表現を可能にしました。現在約140軒の農家が契約



大平 俊治

新潟県酒造組合 会長
(緑川酒造株式会社 会長)

栽培しており、70弱の蔵元が使用しています。当地では、これらの酒造好適米をもとに造られる吟醸酒や純米酒などの特定名称酒の割合が約7割となっており、プレミアムな酒の産地として多くのファンを得ています。

4. 淡麗辛口からその先へ： 多様化する味わいの地平

新潟清酒は長らく「淡麗辛口」の代名詞として語られてきました。これは、新潟の気候風土に合わせて開発された酒米「五百万石」と県内に多い軟水が生み出す、すっきりとしたキレのある味わいを表しています。しかし現在の新潟はそれだけに留まらず、酸味を活かしたモダンなスタイル、低アルコール酒、長期熟成古酒、そしてスパークリング日本酒など、食の多様化に合わせた幅広いラインナップを展開しています。「淡麗」という骨格を維持しつつも、造り手の個性を際立たせた様々な酒が登場し、次世代のファンを魅了しています。

5. 北前船と越後杜氏： 受け継がれる技と流通の記憶

新潟の酒造りは、江戸時代から明治時代にかけて日本海を往来した「北前船」による物流と、冬の農閑期に高い技術を武器に出稼ぎに出た「越後杜氏」によって発展しました。新潟港は幕末の開港五港の一つに選ばれましたが、その背景には、新潟港が信濃川や阿賀野川の舟運で上流から集まってくる米や清酒などの産品をさらに北前船で全国各地に届ける一大集積地としての機能を有していたことが挙げられます。一方、越後杜氏の技も日本全国に広がり、各地の酒造りを牽引してきた歴史があります。この「技術を磨き、他者に伝える」という職人氣質が、現在の新潟清酒における厳格な品質管理や技術革新への柔軟な姿勢に繋がっています。現在は新潟酒造技

術研究会がその系譜を継いでおり、毎年春には「越後流酒造技術選手権大会」を開催しています。

6. 強力なサポート体制： 醸造試験場と新潟清酒学校

新潟の強みは、蔵元個々の努力に留まりません。「新潟県醸造試験場」は、戦前から設置されている全国唯一の独立した公的試験研究機関であり、酒造技術の研究開発や蔵元への個別指導が行われています。また、1984年に当組合内に設立された「新潟清酒学校」も、人材育成の面で極めて重要な役割を果たしてきました。蔵人や後継者、流通関係者に至るまで、酒造りを体系的に学ぶ場を提供するこの学校は、これまでに600名近い卒業生を送り出しており、新潟清酒の品質と思想を次世代へと継承する装置でもあります。このような産官学が連携した重層的なサポート体制は全国的にも類を見ないものであり、ここでもた



戦前に設置された「新潟県醸造試験場」は全国で唯一の日本酒の公的試験研究機関



酒造りを体系的に学ぶ場、「新潟清酒学校」の入学式

らされる「知の継承」こそが新潟の酒を支える屋台骨となっています。

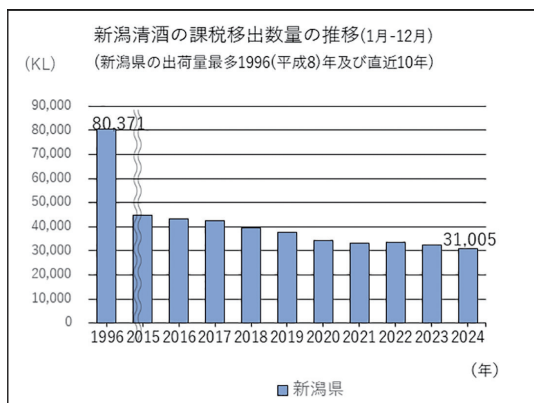
7. 日本酒学の確立とさらなる飛躍



「日本酒学センター」は文理融合型の講義を提供

これらの延長線上にあるのが、新潟大学を中心に県、酒造組合が連携して創設した「日本酒学(Sakeology)」です。これは、醸造学だけでなく、経済学、歴史学、医学など、あらゆる学問領域から日本酒を研究する世界初の学問です。もともとそのようなものがあつたらとの声がありましたが、新潟大学と当組合が意見交換したことをきっかけにとんとん拍子に話が進み、2017年に県知事、大学学長、酒造組合会長の三者で連携協定を締結し、活動が始まりました。その中心的存在である「日本酒学センター(2018年設立)」は、学部の垣根を超えた文理融合型の講義を提供し、毎年定員を上回る履修希望があります。また、酒蔵を訪問する実地学習や大学院の設置、ワイン学のメッカであるボルドー大学やUCデービス校との提携など進化を続けています。学際的なアプローチにより日本酒の価値を理論的に体系化し、次世代のリーダーを育成するこの取組は、日本酒を一時的な日本ブームの一事例ではなく、持続的な文化へと昇華させる鍵となるものと期待しています。この日本酒学センターにより、醸造試験場、清酒学校に続く酒造りの支援体制の最後のピースが嵌ったこととなります。

8. 日本酒をめぐる厳しい状況とユネスコ無形文化遺産への登録



新潟清酒の課税移出数量の推移(1月-12月)

国内市場の縮小や若者の酒離れ、コロナ禍以降のコストプッシュインフレなど、日本酒を取り巻く環境は依然として厳しいものがあります。しかし一方で、明るい話題もあります。2024年末、日本酒を含む「伝統的造り」がユネスコ無形文化遺産に登録されました。麴菌を巧みに操る日本独自の技術が、世界共通の宝として認められたのです。新潟県内でも、この登録を契機に自国の文化を再評価する動きが強まっており、伝統を守りながらも次世代へどう繋ぐかという議論が活発化しています。

9. にいがた酒の陣：国内最大の室内日本酒イベント

こうした中、新潟は積極的な情報発信を続けてきました。その象徴が、国内最大級の日



毎年2万人以上が訪れる「にいがた酒の陣」

本酒イベント「にいがた酒の陣」です。毎年3月初旬に2日間にわたって開催され、県内の蔵元の大半が出展し、2万人以上の日本酒ファンが集います。この始まりは、ドイツのオクトーバーフェストの視察がきっかけでした。それまでも大消費地に出向いて新潟清酒のPRに努めていましたが、なかなか注目されませんでした。ところが、世界中から600万人もの人が集うオクトーバーフェストを目の当たりにし、これまでの取組とは逆方向のベクトルとなる「消費地から新潟に来てもらうイベントスタイル」に転換することにしました。2004年から始まったこの祭典は、大きな反響を呼び、毎年チケットが発売早々に売り切れるという盛況を博しています。特に魅力的なのは蔵元と消費者が直接触れ合う場となっていることであり、参加者は多くの銘柄を試飲するかたわら、それぞれの蔵の歴史や酒の特徴、酒造りの苦労話などを直接杜氏や蔵人から聴くことができ、また、蔵元にとっても来訪者の生の声を聴くことにより、今後の製品づくりの参考とすることができます。にいがた酒の陣は、新潟の初春の風物詩としてすっかり定着するとともに、新潟清酒のエネルギーを肌で感じる絶好の機会となっています。

10. 新潟清酒達人検定： ファンと共に育つ文化

2008年に創設された「新潟清酒達人検定」は、単に飲むだけでなく、酒の背景を学ぶ楽しみを提案するイベントです。銅・銀・金とステップアップしていく仕組みとなっており、全体の合格者数は既に6,000人を超えています。味わいだけでなく、歴史や技術、文化的背景を学ぶことで、消費者を単なる飲み手から「理解者」へと育てるこの試みは、日本酒文化の持続性を高める重要な取組となっています。また、この検定に合格することがゴール

ではなく、「達人の集い」などの行事を通じてそれぞれの親睦を深めるとともに、酒の陣の各蔵のブースでの助っ人として、あるいは、県内居酒屋や各種SNSでの伝道師として、大いに活躍していただいております。

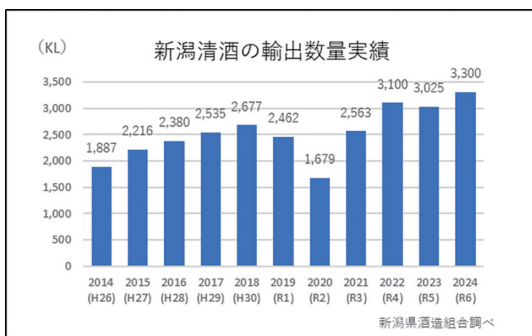


新潟清酒達人の集い

11. 令和の米騒動と原料米の確保

2024年から2025年にかけて、高温障害や需給バランスの乱れによる「令和の米騒動」に伴い、酒造業界も大きな影響を受けました。一昨年、そして昨年と続けて大幅に値上がりし、その幅も桁違いで、一俵あたり一万円以上の上昇となりました。各蔵にとって酒米の急激な値上がりは、まさに死活問題です。一方で酒米と食用米の価格が逆転し、酒米を作る農家が減ってしまう可能性もあります。まさに大きなジレンマに陥っている状況です。幸い、新潟県から重点支援交付金による支援措置を講じていただいたことで一息ついているものの、今後も米価格の高騰が続けば問題が再燃する可能性もあります。嗜好品である酒は価格転嫁にも限界があるので、今後は各蔵の経営改革や商品構成の見直しに加え、高温に強い品種の選定や農家との直接契約・連携強化による安定調達など、持続可能な原材料確保と経営の安定化に向けた取組を強化していく必要があります。

12. インバウンドと海外輸出： 制約を乗り越える戦略



新潟清酒の輸出数量実績

海外市場については、日本ブームや円安傾向も手伝って順調に拡大しています。しかし、一方で、トランプ関税の影響により、最大市場であるアメリカへの輸出について懸念が生じています。また、これに次ぐ中国市場については、福島第一原発事故以降、新潟を含む10都県に対する輸入規制が続き、出口が見えません。こうした国際情勢の不透明な動きは、新潟清酒にとっても無視できない課題であり、海外での産地PRや商流の拡大などにさらに取り組んでいく必要があります。また、昨今のインバウンド客の急増には目を見張るものがあり、昨年は終盤に日中関係の悪化に伴いやや勢いが鈍ったものの、400万人を超え、史上最高を記録しました。こうした情勢を踏まえて、県内でも昨年10月に「新潟酒蔵ツーリズム推進協議会」が発足しました。当組合としてはこのような新たな組織とも協力して、インバウンド客を含む県外からの訪問客に直接酒蔵などを訪れ、試飲や酒造りの一部を体験してもらうことで、単なる「モノ消費」を超えた「コト消費」やストー

リーを盛り込んだ「トキ消費」の機会を増やしていきたいと考えています。

13. さかすけと新潟オリジナル酵母： 科学が拓く新境界

新潟独自の挑戦は、酒そのものに留まりません。県醸造試験場が2001年から研究している「さかすけ」は、酒粕を乳酸菌で発酵させた新製品で、美容や健康効果が注目され、日本酒の副産物に新たな価値を与えました。また、醸造試験場では新潟オリジナル酵母の開発も進めており、これらの取組によってさらに他産地との差別化が図られることも期待されます。

14. 次なる100年へ向けて

幸いなことに、我々の業界には若手が続々と戻り、新しい発想で酒造りや経営に力を発揮し始めています。昨年は輸出専用免許を持つ蔵が新たに2蔵加わりました。組合としては、若い力の勢いを追い風にしながら、この難局を乗り越えていく所存です。新潟清酒は今、伝統という重みを背負いながら、地政学的な荒波を乗り越え、革新という翼を広げて世界へと羽ばたこうとしています。現在の厳しい外部環境は各蔵元にとっても大きな試練ではありますが、それは新潟清酒をより強く、より洗練されたものへと進化させる糧となるはずです。今後も新潟清酒は、新潟県、そして日本の看板商品であり続け、観光、伝統、文化、地域振興など幅広い分野で大きな役割を果たしていくものと確信しています。



新潟清酒は、令和4年(2022年)2月、①産地としての「新潟」の保護、②偽物・類似品の発生防止を目的として、国税庁から清酒の地理的表示「新潟」の指定を受けた。認定を受けた新潟の清酒には、容器包装などに「GI NIIGATA」、「GI新潟」の表示が入っている

新潟県酒造組合の情報はここからご覧いただけます

新潟県
酒造組合

新潟県酒造組合公式サイト



トキが舞う佐渡島の新たな魅力を発信 世界遺産へと誘う唯一の航路が描く未来



GUEST

尾渡 英生

佐渡汽船株式会社
代表取締役社長

INTERVIEWER

松原 裕

SCOPE
理事長

新たなスタートを切った佐渡汽船

松原 私は2022年から3年間、トリニダード・トバゴの日本大使館に勤務していました。着任前に外務省から「あなたの使命の一つは、『佐渡島の金山』を世界遺産にすることだ」と言われたことを記憶しています。

ユネスコには、世界各国の代表者が集まり世界遺産への登録を協議する世界遺産委員会があります。私が担当していた管轄9カ国のうちの1つであるセントビンセントは、その委員会の代表国に入っていました。ですから着任するや否やセントビンセントの首相にお会いして、「日本の佐渡島の金山をぜひお願いします」と言いましたら、すぐに外務大臣を呼んで、その場で「日本を支持せよ」と言っていた。そのことが、ものすごく印象に残っています。

そして私の任期最終年でもありました2024年に、新潟県

の悲願、日本の悲願であった世界遺産への登録が実現しました。私も非常に感慨深く思っています。

その「佐渡島の金山」には、佐渡汽船なくしては行けません。創業から100年を越える歴史の中で、いろいろとご苦労をされてきたと思います。まずは尾渡社長の佐渡汽船への思いなどをお話いただけたらと思います。

尾渡 最初にお話ししておきたいことは、佐渡汽船の大きな出来事として、2022年に「みちのりグループ」の一員になったということです。経緯をご説明します。

バブル経済の崩壊によって多くの日本企業が傷んだ際に、その再生を目的に産業再生機構が設立されました。この機構は時限立法でしたので、4年間で解散しましたが、解散後に機構のメンバーだった民間出身者が、今度は民間の手で日本の事業再生に取り組もうと、新たに株式会社経営共創基盤という会社を設立しました。

その中で、交通事業、観光事業に特化して取り組んでいるのが、「株式会社みちのりホールディングス」になります。日本各地では地域の皆さんの足を支える、主に乗合バスの交通事業者がいます。しかし地域の人口減少をはじめとする様々な問題を抱えており、経営的にも厳しい状況にあります。



① 新潟西港のフェリーターミナル
② カーフェリー「おけさ丸」

そのような事業者に対して、出資や人材を送りながら事業再生を進めています。このようにして「みちのりグループ」は、東日本を中心に交通インフラの維持改善に取り組んでいます。

佐渡汽船の場合、輸送実績のピークは1990年代で、輸送人員は約300万人でした。それがコロナ禍前の2019年には150万人に半減し、コロナ禍の2020、21年にはさらに76万人に減少しました。いわばコロナによってとどめを刺されたような状況です。このままでは経営を継続できないため、株主である新潟県やメインバンクの第四北越銀行から「みちのりホールディングス」にお話があり、2022年3月より「みちのりグループ」の一員として新たなスタートを切ったわけです。

佐渡島の観光需要を掘り起こす

松原 佐渡島の人口はどのような状況なのでしょう。

尾渡 1950年頃には約12万6000人でしたが、現在は約4万7000人で、ここ20年間は毎年1000人ずつ減少している状況です。

松原 佐渡島の人口は減っているわけですが、とはいえ新潟本県とのつながりは重要で、佐渡汽船はその生命線です。今後の経営をどのように考えられているのでしょうか。

尾渡 人口が減ったとはいえ、日本の一地方都市として4万7000人は決して少なくないと思っています。私たちも佐渡島の皆さんの生活を支えていると自負しています。定期航路は佐渡汽船しかありません。物資を輸送する、佐渡島の人々の移動を支えることは、私たち以外にはできません。現在、両津・新潟、小木・直江津の2航路をカーフェリー3隻、ジェットフォイル3隻、貨物船1隻で運航しており、今後もしっかりと経営を続けていかなければいけないと思っています。

しかし、新潟県全体の人口も1997年の約250万人をピークに、今は約210万人まで減っています。ですから、県民の皆さんの往来だけでは輸送人員の増加は見込めません。

加えてコロナ禍を経て、人々の行動が大きく変容しています。出張等も回数が減ってオンライン会議に切り替わりました。また、佐渡島から新潟に来て買物をしていた方もオンラインショッピングを活用されるようになりました。

さらに佐渡島の人口が減ることで、それをきっかけに親族や友人など佐渡島にご縁のある方が島に帰らなくなる、来られなくなる。これが人口減少以上に人々の往来に大きく影響していると思っています。

そのような減少を観光客で埋めていく。2025年はようやく132万人まで輸送人員が回復しました。これを何とか継続して伸ばしていくこととなります。そのような中で「佐渡島の金山」の世界遺産登録は、本当に大きな出来事で、私たちはその果実をいただき、梔子にしてたくさんの観光客に来ていただきたいと考えています。

松原 その観光にもいろいろな種類があると思います。どのような分野に、どう働きかけをされているのでしょうか。

尾渡 2024年に東京でアンケート調査を実施しました。質問内容は、佐渡島のことを知っていますか、そして知っている方には何を知っていますかということです。その結果、佐渡島をよくご存知という方は主に50歳以上の方でした。それ以下の方は、名前は聞いたことはあるけれども、学校の地理の授業で習った程度に留まっていました。しかし50歳以上でよく知っていると回答した方も「たらい舟」「金山」「トキ」など5つまでしか具体名が出てきませんでした。

これらの結果を受けて、観光需要を掘り起こすために、もっと佐渡島を知ってもらう必要があると考えました。大きなマーケットとして期待できるのは、首都圏や関西圏に在住の50歳以上の方で、特にまとまった休みが取れて、



③ ジェットフォイル「すいせい」



④ 佐渡島の玄関口である両津港フェリーターミナル



⑤「トキ」。学名はNipponia nippon (ニッポニア・ニッポン)。国の特別天然記念物

個人旅行ができる人たち。彼らをターゲットに、2025年に佐渡島の新たな魅力を伝える30秒のテレビコマーシャル(以下、「CM」という)を製作して、首都圏などで放映してもらいました。

このCMは今でも特設サイト「さどタイムス」※でご覧いただけます。同時にJRやJALとタイアップして、首都圏のJRの主要駅や、伊丹空港のJALのカウンターなどに広告を出していただきました。

このようなプロモーションを行うことによって、旅行会社にも「佐渡島は世界遺産だけではなく、多くの魅力をしっかりしたプロモーションもしている」と認識していただき、旅行商品を企画・販売していただくところまでつながればと考えていました。そして実際にやっていただきました。ですから、2025年は結構な成果が上がっています。これを2026年にもつなげていこうと考えています。

松原 従来のイメージに囚われない新たな佐渡島の魅力とは、具体的にはどのようなイメージになるのでしょうか。

尾渡 自然景観でいえば尖閣湾や二ツ亀。金山でいえば北沢浮遊選鉱場になります。北沢浮遊選鉱場はライトアップされた夜景が、宮崎駿のアニメの世界のようでとても趣きがあります。建築物では山本悌二郎の別荘です。悌二郎は佐渡島出身の実業家、政治家として、明治時代に活躍した人物です。その悌二郎が矢島・経島に建てた別荘が修復されて2024年から一般公開を始めています。

伝統芸能では「能」です。CMのキャッチコピー「佐渡島、忘るべからず。」は、佐渡島に配流された世阿弥の「初心忘

るべからず」からの流用です。そのナレーションは、世阿弥から数えて26代目の観世清和さんの長男、能楽師の観世三郎太さんです。そのようなストーリーを持ちながら、佐渡島の新たな魅力の情報発信をしました。

松原 非常にしっかりとした取り組みをされているのですね。2026年に向けたお考えはあるのでしょうか。

尾渡 2026年もこのCMを活用して引き続き佐渡島の魅力を発信していく予定です。しかし、私たちだけでは予算に限りがありますから、来年に向けて新潟県内と佐渡市内で観光業に携わる方々に寄附をお願いしているところです。

ネットとリアルで情報発信

松原 佐渡汽船のサービス面での工夫などについてはいかがでしょうか。

尾渡 多くのお客様に乘船いただくためにも、DXを含めた様々なUIの改善に取り組んでいます。例えばオンラインでの予約・決済手続きをやすくする。決済方法の選択肢を増やし、手続き後に届いたQRコードを専用端末にかざしてそのまま乗船する。乗船前の利便性を向上させて、少しでも予約率を上げていきたいと取り組んでいます。また、ターミナルの案内もAIによる多言語化を導入しました。例えば緊急事態などが発生したときに、スタッフが「避難してください」と言った日本語を、その場ですぐに多言語化していく。このようなことも行っています。

松原 海外旅客へのアピールや、海外旅客に対するホスピタリティについては、どのようにお考えですか。

尾渡 海外に向けては、CMを含む英語版の情報を各種SNSで発信しており、全て検索できるようにしています。ただし、如何せん新潟県に来られる海外旅客は少ないです。冬場の越後湯沢などの地域以外は本当に少なく、佐渡島に来られる海外旅客も年間約6000人に留まります。

松原 SNSの力は大きいと思いますが、実際に佐渡島に行ってみたいという気持ちにどのようにさせるかは難しいところでもあると思います。

尾渡 確かに世界中が自分たちの観光地に来てくださいますと情報発信している中で、佐渡島を選んでいただくことは容易なことではありません。

そのため実際に海外に出て、いわばリアルの世界で情報

発信することも行われています。例えば佐渡市では2025年10月にフランス・パリで佐渡固有の文化のプロモーション活動が行われました。佐渡汽船も単体ではなく、チーム佐渡やチーム新潟として海外に出ていく必要もあると考えています。

その他、海外のメディアの方やユーチューバー、インフルエンサーの方々に来てもらい情報発信をしていただいています。

あとは日本国内のランドオペレーターへのセールスです。海外の旅行会社が日本に旅客を送り出すわけですが、日本到着後の旅行プランやアレンジメントは日本の旅行会社が行います。そのような海外旅客向けに手配する人たちのランドオペレーターと呼んでいます。その方々にセールスをする。このように世界中の方々に向けて何かをしようとするとやることはたくさんあります。

次の時代へ紅白の橋を架ける

松原 さきほど様々な佐渡島の魅力をご紹介いただきましたが、トキもその一つかと思います。実はトリニダード・トバゴの日本大使館時代に、スカーレットアイビスというトキに出会いました。現地では国鳥に位置づけられて大切にされています。まさに深紅の鳥で、シルエットにすると日本のトキとまったく同型なのです。

そのようなこともあり、現地の皆さんとは、「こちらは紅で日本は白。紅白で組み合わせたらいいな」と話していました。同じトキつながりで、これを機会に相互に交流ができればと思っています。

尾渡 佐渡島のトキは、一度は絶滅したところから復活した。その復活のために佐渡島では農薬を使わない稲作を行うなど、島の人たちの努力があった。そのおかげで、今の佐渡島の自然環境が保たれている。そのようなストーリーは非常に惹かれます。トキという象徴的な鳥と、同じトキとしてスカーレットアイビスがつながれば、情報発信する上で非常に良い材料になるのではないかと思います。

松原 紅白のトキが相互に架け橋となって、地球の表と裏をつなぐイメージですね。佐渡島に来てください。そしてトリニダード・トバゴにも来てくださいということ。そのメッセージを受けた一部の人でも実際に足を運ぶ時代にな

ればいいと思います。

コロナ禍を経た非常に厳しい状況の中で、事業の再生に向けたいろいろな取り組みについてお聞きすることができました。SCOPEは港湾と空港を担っていますので、その方面から新潟、佐渡の発展に少しでもお役に立てればと思っています。

尾渡 現在、国と新潟県が一緒になって、両津港南埠頭の岸壁の耐震化工事と埋立工事を行っています。工事完成後は、埋め立ての関係でジェットフォイルの離発着位置も海側に移動することになります。それに伴って老朽化したターミナルも建て替えが必要だと考えています。

一方で、両津の商店街もかなりシャッターが目立つような状況ですので、新潟県や佐渡市に地域の再開発をどこまでやっていただけるのか。そのような取り組みも必要になってくると思っています。

松原 そうですね。両津港は佐渡島の玄関口ですから、そこがしっかりしていないといけません。本日は貴重なお時間をいただきありがとうございました。



⑥「スカーレットアイビス」。和名はショウジョウトキ。トキと同様の体形、習性を持つ。トリニダード・トバゴ国の国鳥

※CM動画「佐渡島、忘るべからず。」はこちらからご覧いただけます



「佐渡汽船 HP」
佐渡汽船の公式サイト



「さどタイムス」
佐渡の特別な時間を提案する、
新しい旅のガイドです。



みなとまち新潟とつながる世界遺産と日本酒と

いにしえ

古より歴史を刻む日本海の拠点港における “湊まち”から“港湾都市”の変遷と将来像

国土交通省 北陸地方整備局 新潟港湾・空港整備事務所

日本海側の重要な港湾として古くから栄えてきた新潟港。平安時代の法令集「延喜式」には、早くも「蒲原津」として登場している。1672年には、江戸の豪商である河村瑞賢が幕府の命を受けて西回り航路を整備したことで、新潟港は北前船寄港地として繁栄したことで知られている。時代とともにその姿を様々に変えてきた新潟港だが、日本海側の物流、人流の重要な拠点であることは今も昔も変わらない。新潟港はどんな歴史を持ち、どんな未来へ向かおうとしているのか。北陸地方整備局新潟港湾・空港整備事務所の古池所長に伺った。

新潟港を構成する2つの港区

近代港湾としての新潟港の歴史は、1858年、日米修好通商条約により函館、横浜、長崎、神戸とともに日本海側では唯一、開港五港に指定されたことに始まる。正式に開港したのは1869年。同時に、緊急避難などのための補助港として佐渡島の両津港（当時“夷港”）とともに開港した。1885年には両港間に定期航路が設けられ、1932年には佐渡汽船の「おけさ丸」が就航した。現在は1993年就航の3代目の「おけさ丸」をはじめ3隻のカーフェリーと3隻のジェツ

トfoil、1隻の貨物船が新潟と佐渡島を結んでいる。さらに佐渡島との定期航路以外にも北海道等の新たな航路が設けられるなど、新潟港は今日に至るまで日本海側を代表する港として発展を続けている。

現在、新潟港は西港区と東港区の2つの港区から構成されている。信濃川の河口両岸に港湾機能を有する西港区は、市街地に近接していることから、長距離フェリーや離島航路が発着し、主に人流や国内物流の拠点としての機能を果たしている。一方、市北東端の北区と聖籠町との間にある掘込港の東港区の開港は1969年。入港隻数、取扱貨物量の増加、更には船舶の大型化に対応し工業港の機能を拡充することを目的に、国、新潟県、新潟市をはじめとする関係自治体、新潟商工会議所等が一体となり整備された。現在、東港区には日本海側初の国際海上コンテナターミナルによる国際物流や、発電所等が立地するエネルギー供給の拠点としての機能も果たしている。

「新潟港の2024年の総取扱貨物量は2,890万トン。貿易額は9,010億円。総取扱貨物量、コンテナ取扱貨物量ともに、重要港湾以上で『本州日本海側第1位』となっています。西港区が佐渡汽船や新日本海フェリーのフェリー貨物が



国土交通省 北陸地方整備局
新潟港湾・空港整備事務所 所長

古池 清一



新潟港	
西港区	
開港：1869年(明治元年)	
特徴：市街地に近接した人流や国内物流の拠点	
東港区	
開港：1969年(昭和44年)	
特徴：国際物流やエネルギー供給の拠点	



新潟港西港区を離発着するフェリー。写真左:新潟と佐渡島を結ぶ佐渡汽船、写真右:新潟と北海道(小樽、苫小牧)、秋田、敦賀を結ぶ新日本海フェリー

半を占めるのに対して、東港区はLNGや地元の製紙会社が使用する木材チップの輸入が大半を占めるのが特徴です。東港区にある国際海上コンテナターミナルを利用した外貿コンテナ取扱量も、本州日本海側では最大となっています。また、東港区の発電所については、火力に加えバイオマス発電所も稼働中。今後は、新たなバイオマス発電所も稼働予定で、再生エネルギーの観点でも重要な港湾となっています」

新潟港の「水と土との戦い」の歴史

新潟港には多くの定期航路が就航している。外貿定期コンテナ航路としては韓国、中国方面へ週9便が就航。北九州経由で神戸を結ぶ国際フィーダー航路、門司と博多を結ぶ内航フィーダー航路が、それぞれ週1便就航している。また、国内フェリー航路として、北海道、秋田、敦賀を結ぶ長距離航路と、佐渡島を結ぶ離島航路が就航している。さらに、昨今全国的なクルーズ船が増加回復している中、新潟県内のクルーズ船寄港数も増加し、新潟港では2025年は過去最高の21隻が寄港した。このうち、西港区はラグジュアリークラス、東港区はカジュアルクラスを主体としたク

ルーズ船が多く寄港する傾向にある。

こうして開港以来、順風満帆に歩みを進めてきたかに見える新潟港だが、実はかねてからの大きな難題が存在する。それは西港区の河口港としての宿命である。

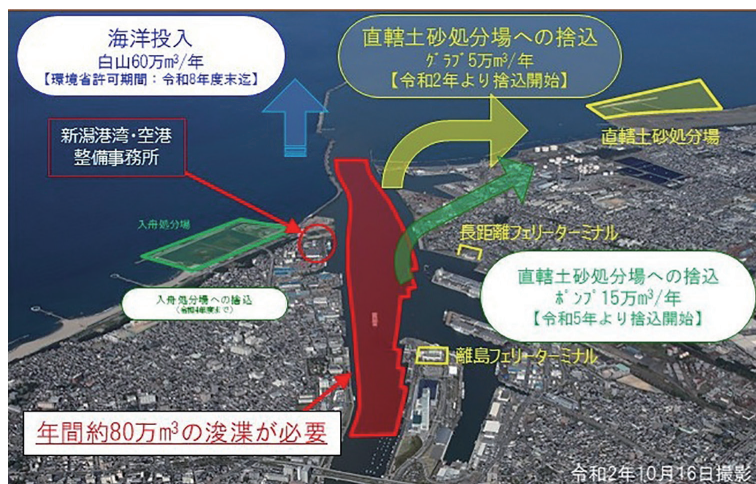
「西港区は、長野県から新潟県を流れ日本海に注ぐ日本一長い信濃川の河口に位置し、上流部からの大量の土砂が港内に流下し、それが絶えず堆積しています。港内の埋没のありようは流路の変遷に大きく影響されてきました。明治時代以降、大河津分水路や関屋分水路の整備によって土砂は減少しましたが、その後も大量の土砂が流入する事態は変わっていません。黙って見ていれば港に必要な水深が確保できず新潟の人流・物流、佐渡島民の生活に支障をきたすため、手をこまねているわけにはいきませんでした」

そこで、新潟港において古くから行われてきた港湾整備は西港区の航路泊地浚渫である。信濃川上流から流入して堆積する土砂を浚渫して、現在は7.5～11mの航路水深を確保している。この事業の本格的な始まりは、近代港湾が求められた大正時代であり、当初は県主導で行われていたが、その後国の直轄事業として実施されている。現在、年間約80万m³の大宗の浚渫を国が保有する大型ドラグサク



ドラグサクシオン船白山

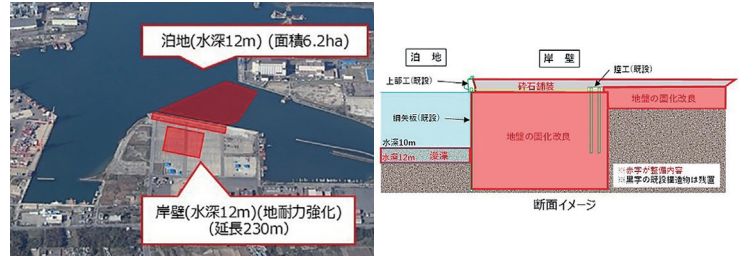
開港以来、航路維持のために浚渫が欠かせない西港区。平日は毎日、浚渫が行われている。白山(写真上)は、新潟港湾・空港整備事務所所属の浚渫船。油回収船も兼ねており、油流出事故発生時には、現場海域での回収作業に従事する



グラブ浚渫船



ポンプ浚渫船



工業開発の拠点として砂浜を掘り込んで整備された東港区。周辺には工業地帯が展開している。またLNG基地や火力発電所が立地。製造業の原料供給基地として地域の産業を支えている。南ふ頭地区(図中央・右)では、基地港湾としての整備が進められている

シオン船「白山」が通年24時間体制で行い、部分的にグラブ又はポンプ浚渫船による請負浚渫が行われている。現在の白山は2002年に竣工した3代目となる。

「浚渫した土砂は、従前は沖合へ海洋投入されてきましたが、近年は環境規制に対処すべく、新潟空港沖に土砂処分場を整備し、請負浚渫分はそこへ投入しています。浚渫工事は新潟港にとって欠かせない事業であり、いわば新潟港の発展の歴史は、『水と土との戦い』の歴史ともいえるわけです」

省エネの屋台骨を支える基地港湾の整備

新潟港では、この他にも様々なプロジェクトが進行中だ。2022年、経済産業省及び国土交通省が、新潟県村上市及び胎内市沖を「海洋再生可能エネルギー発電設備の整備に係わる海域の利用の促進に関する法律」に基づく「促進地域」に指定した。また、2023年、国土交通省が新潟港を港湾法に基づく「基地港湾」に指定した。これを受けて新潟港では、東港区南ふ頭地区で国際物流ターミナル整備事業が着工し

た。この事業は洋上風力発電設備の基地港湾として、岸壁の地耐力強化や泊地の浚渫などを行う。洋上風力発電設備の設置と維持管理には、従来貨物の10倍の重さとなる重厚長大な資機材を扱うこととなる。それに耐えうるだけの岸壁の地盤改良をいかに整備するかが、この事業の最大のポイントになる。

「地盤改良の技術的なポイントは最適なセメント量で均一な地盤づくりをすることですが、実際これだけの強度の均一地盤造成を決められた予算内及び工期内で発現させるには難しい課題も多々ありました。様々な調査や試験、施工方法の検討を重ね工夫した結果、無事に地盤改良を完工できる目途が立ちました。現在のところ事業は順調に進んでいます。今後は、安全に工事を進め予定の工期に収めることがミッションになります。この事業を通して再生可能エネルギーの利用を促進し、脱炭素社会の形成に貢献したいと考えています」

整備後は、民間企業で構成される「村上胎内洋上風力発電株式会社」が、2029年に商業運転を開始する予定であり、



インバウンド対策として佐渡島の小木港、両津港で実施された「クルーズ船寄港時二次交通現地実証事業」。回復基調にあるクルーズ船寄港を見据え、課題であった佐渡島上陸後の二次交通の利用状況が検討された



新潟港万代島地区万代テラスでは、みなと緑地PPPを活用した官民連携による新たなみなとの賑わい空間の創出の取り組みが始まっている(図3点とも新潟県港湾環境整備計画認定資料から転載)

15MW級の風車を46基設置する計画となっている。

インバウンドを見据えた佐渡島での実証事業

新潟港のみならず、2024年に「佐渡島(さど)の金山」で世界文化遺産に登録された佐渡島でも、海からの主要玄関口である両津港のフェリー岸壁の老朽化対策と耐震強化の改良が直轄事業として行われている。

また、2025年にはインバウンド対策として、佐渡島の小木港と両津港において、クルーズ船寄港時における二次交通のあり方を探る「クルーズ船寄港時二次交通現地実証事業」が実施された。小木港では国際クルーズ船「ハンセアティック・インスピレーション」の旅客を対象に、また、両津港ではクルーズ船「飛鳥Ⅲ」の旅客を対象に、それぞれシャトルバスやグリーンスローモビリティ(小型電動車)などを用意し、その利用状況を調べた。その結果、海外旅客は団体ではあまり行動せず、個人行動がメインだという結果が判明した。佐渡島へのクルーズ船の寄港はコロナ禍を経て回復傾向にあり、世界文化遺産登録を機にさらなる寄港の増加が期待される。その一方で、港の沖留によるボートでの上陸は時間ロス等の機会損失が課題であり、ハードとソフト両面でのクルーズ船寄港に向けた対応、更には能登半島地震を踏まえた離島防災拠点のあり方なども含めた佐渡港湾の将来像の検討を推進していくつもりだ。

市民がワクワクするような未来図を

新潟港では、港の賑わいを生み出す取り組みも行われている。その一つが万代島地区にある「万代テラス」での官民連携プロジェクトだ。国土交通省港湾局では、港湾緑地等において官民連携により港の賑わい空間を創出するために、港湾環境整備計画制度(みなと緑地PPP)の導入を図っている。そうした中で「万代テラス」を新潟県にみなと緑地

PPPに認定し、公募にて民間事業者が選定された。みなと緑地PPPの活用は、神戸港、大阪港に次ぐ全国で3カ所目となる。民間事業者は緑地を借り受け、バーベキュー施設、サウナ施設等の収益施設を整備するとともに、キッチンカーやマルシェ等のイベントを開催する等、日常的な賑わいを創出する計画としている。

「同じ万代島地区には、展示場や会議室とホテルなどを含む複合一体型コンベンション施設『朱鷺メッセ』があり、人気歌手コンサート等のイベントが開催される日は大変な人出になります。こうした施設も含めて、物流と人流の両面に配慮しながら港の都市機能としての効果を最大限発揮させることが私たちに課せられた課題です。幸いにも新潟は街と港、空港、駅が近接している特徴があるので、この強みを活かして時代に合わせた将来像を提示し、市民がワクワクし、選ばれる新潟となるような新潟港の未来を描きたいと思います」



日本一の大河「信濃川」に架かる萬台橋(ばんだいばし)は新潟のまちのシンボリックな存在。2004年には国の重要文化財に指定された



新潟港湾・空港整備事務所公式X
こちらからご覧いただけます。



みなとまち新潟とつながる世界遺産と日本酒と

「佐渡島の金山」からトキまで 佐渡島の魅力を世界に発信する取組

佐渡市 観光文化スポーツ部 世界遺産課

「佐渡島の金山」世界遺産登録

2024年7月27日、ユネスコ世界遺産委員会の審議を経て、「佐渡島の金山」は世界遺産として登録が決定された。

佐渡島の金銀山の歴史は、平安時代に砂金を産出したことで始まる。以降、佐渡島は金を産出する島として広く知られるようになった。

江戸時代の日本は鎖国政策によって海外からの技術や知識の流入が制限されていた。そのため独自の手工業による採鉱・製錬技術が開発されて、それが江戸時代末期まで継続した。さらに、その手工業を効率化するための管理体制と労働体制が徳川幕府により構築されたことで、世界有数の鉱山として高品質の金を大量に生産することができた。

このことは、現地に残る鉱山や集落の遺跡によって証明されており、同じ文化圏のアジアにおいても他に類を見ない貴重な文化遺産となった。こうした歴史的価値が認められ、「佐渡島の金山」は世界遺産に登録された。

ここでは、世界遺産登録までの経緯、江戸に金を運ぶための佐渡島の港、そして登録後の現在の取り組みなどについて、佐渡市観光文化スポーツ部世界遺産課の宇佐美課長補佐に伺った。

民間主導で始まった登録への道

「佐渡島の金山」が世界遺産登録を目指したきっかけは、1997年に始まった市民団体の運動からだという。

「当時、島根県では石見銀山の世界遺産登録を目指す取り組みが続けられていました。その後、2007年に『石見銀山遺跡とその文化的景観』として登録されましたが、当時の状況を見て、佐渡島には金銀山に関する様々な記録が非常に多く残っていたことから、郷土史家や大学の先生方の下で勉強会を行う形でスタートし、後に金銀山が所在する4町村が調査に加わりました」

日本の世界遺産への登録に向けた活動は官主導で始まることが多いが、佐渡島のように民間主導で始まることは珍しいという。実際に行政による鉱山関係の遺跡等の現地調査が行われるようになったのは98、99年頃からだという。

その後、2004年に佐渡島で旧10市町村が合併して、島全域を市域とする佐渡市が誕生。2年後の2006年には新潟県と佐渡市との連携による取り組みが開始された。

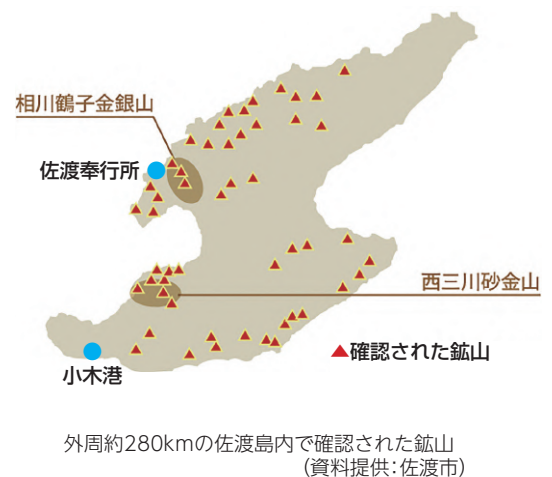
このような経緯を経て、2010年に最初のステップである日本の世界遺産登録の候補目録であるユネスコの世界遺産暫定リストに記載されることとなった。



佐渡市 観光文化スポーツ部
世界遺産課 課長補佐

宇佐美 亮

「佐渡島の金山」世界遺産登録までの経緯（一部抜粋）	
1997年 11月	市民団体による運動が開始
2006年 4月	新潟県と佐渡市の連携による取り組みが開始
2010年 10月	ユネスコの世界遺産暫定リストに記載
2015年 3月	国へ推薦書原案を提出（以降、2021年まで5度挑戦）
2021年 12月	国内の推薦候補に選定
2022年 2月	政府が推薦を正式表明
2023年 8月	イコモス現地調査
2024年 6月	イコモスから勧告
2024年 7月	世界遺産登録が決定





「佐渡島の金山」の構成資産。写真左：佐渡島最古といわれる西三川砂金山、写真中：海上から陸を見ると山が輝いていたという伝説が残る鶴子银山、写真右：名実ともに日本最大の金銀山である相川金銀山。写真は鉱石を掘り取った結果、山が2つに割れた「道遊の割戸」（資料提供：佐渡市）

日本には原則1年に1回の推薦

世界遺産に登録されるためには、対象となる物件—構成資産に顕著な普遍的価値があることを具体的に証明する、つまり国が指定・選定する重要文化財、重要文化的景観といった文化財であることが必要であった。しかし、活動開始時の佐渡島には国の文化財が非常に少ない状況だった。

「順次調査を行いながら、同時に指定・選定の申請を行い、国の文化財になったものから少しずつ構成資産に含めていきました。調査に時間を要しましたが、ようやく2015年に最初の推薦書原案を提出するに至りました」

推薦書原案は、国がユネスコに提出する推薦書の基となるものだ。この原案を国が審査してユネスコに推薦する物件を決めていくことになる。

「日本は原則1年に1件を推薦する方針です。推薦書原案の提出を始めた頃は、先に登録された他の物件も推薦候補でしたし、また文化遺産だけではなく、自然遺産を推薦する年もありましたから、佐渡島は何回か推薦から漏れて、そのたびに原案を提出し直すことを繰り返しました」

最終的には2021年に日本からの推薦候補に選定され、翌22年にユネスコへ推薦書が提出された。

江戸の往時を語る数々の記録

2023年には、ユネスコの諮問機関であるイコモスが現地調査を実施。同時に書類審査も行われて2024年に出されたイコモス勧告への対応を経て、同年7月に開催された世界遺産委員会で世界遺産への登録が決定された。22年の推薦書提出から約2年後の登録となった。

「佐渡島の金銀山に関する古文書や絵巻といった記録は非常によく残っています。そのおかげで調査の際も、かつて遺構の上にあったものがどのような形状であったかを検証できましたし、その価値づけも行うことができました。実際に坑道を調査したときも絵図の正確性を確認することができました。また先行して郷土史家や大学の先生方が古文書の研究を進められていたことも、世界遺産登録への取り組みに弾みをつけたのではないかと思います。」

多くの記録が残された理由は、やはり江戸幕府が佐渡島の金銀山を重要視したからだと思います。佐渡奉行所が置かれ、江戸から赴任してくる奉行のために、金の採掘から小判の製造までを描いた絵巻が描かれ、現在も100本以上残っています。中には、絵師を同行させて、江戸から佐渡までの旅程を描かせた奉行もあります」



「相川町絵図」（佐渡市所蔵・永井家より寄贈）（資料提供：佐渡市）



「佐渡銀山往時之稼行絵巻」(部分) (佐渡市所蔵) (資料提供：佐渡市)



世界遺産登録に向けた様々な取り組み。写真左：現場見学会、写真中：砂金採り体験、写真右：市・県担当職員による出前授業（資料提供：佐渡市）

金銀を江戸に積み出した小木港

佐渡島の金山から産出された金銀は小木港から江戸に運ばれた。江戸時代初期には、代官大久保長安の命により小木半島の入り江に港が整備されて金銀の積出港に定められた。小木港は金銀の積み出しだけでなく、採掘に必要な人、モノ、食料などの物資の移入など、佐渡島の玄関口として機能した。その後、河村瑞賢により西廻り航路が開設され、北前船の寄港地にもなった。佐渡島の金は、小木から対岸の出雲崎までの海路を経て、江戸までは陸送となる。

「江戸までのルートは、基本的に北国街道、三国街道、会津街道の3つと定められており、北国街道には投宿する宿場や金を保管する蔵など行程に関する記録も残っており、江戸までは概ね20日間ほどで運んでいたようです」

現在の小木港には、江戸時代を偲ばせる面影は残っていないが、近代にいたるみなとまちの歴史的な建物や地割が良好な状態で残っていることから、2024年8月に国の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）に選定された。

また、毎年、当時の衣装姿で金を背負った馬を引きながら、相川の佐渡奉行所前から小木までを徒歩で行く「御金荷の道」というイベントを開催している。



佐渡奉行所前をスタートし、小木町までを徒歩で金を運ぶイベント「御金荷の道」（資料提供：佐渡市）

鉱山に分け入り物証を探す

佐渡島の金山は、16世紀末から1989年の休山まで約400年以上の歴史を持つ。そのため、世界遺産登録の取り組みが始まった当初は、構成資産に明治から昭和時代の鉱山など関係するあらゆるものを含めて検討したという。

「明治以降のモノも確かに記録も含めて残っていますが、いざ海外と比較したときに、実は海外にも同様のモノが残っているわけです。ですから、世界遺産としての価値を考えて、日本唯一のモノを対象にするために、あえて江戸時代に絞り込みました」

世界遺産登録の取り組みでの苦労点を伺った。

「国の史跡の指定を受けるために、構成資産の候補になっていた鉱山遺跡を中心に行った分布調査です。鉱山のどこにどのような採掘の遺跡、遺構などがあるのか、その分布が指定申請を行うための物証になるわけです。調査は山に分け入って行うわけですが、夏場はスズメバチやマムシが出て危険なため、11月以降から翌年5月までの雪解けの限られた期間で調査を行う必要がありました。成果もありましたが、体力的にはなかなか大変な調査でした」

また、合併前の旧10市町村間での世界遺産登録に対す



みなとまち小木の全景。歴史的建造物や地割を残す小木町は国の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）に選定された（資料提供：佐渡市）



写真左：イコモスの現地調査。写真右：世界遺産委員会の様子を見守るパブリックビューイングを開催。写真は新潟会場にて登録決定の瞬間の様子（資料提供：佐渡市）

る温度差も感じていたという。

「しかし、市町村合併を経て、現地説明会などの情報発信や、テレビの特番や新聞などの報道を通して、機運は徐々に盛り上がりました。推薦書が提出された、イコモスが現地調査に入ったという情報が出るたびに、市民の皆さんも実感が湧いてきたようでした」

今はSNSの影響力の大きさを実感しているという。子どもたちに人気がある佐渡島出身のYouTuber「けえ【島育ち】」の動画に、佐渡市長が出演して金山を紹介するなど、親も子も世代を超えて巻き込んでいった。

「佐渡島の金山」をどう保全し活用するか

世界遺産登録後、佐渡市と新潟県は「『佐渡島の金山』世界遺産会議」を設置。登録された構成資産の保存管理と整備活用、その周辺環境の保全に取り組むこととなる。

「構成資産をどう保全していくのか。資産の中には保全のための修理・修繕が必要なものも当然ありますので、そのような作業を継続して行うことになります」

今後は、学識経験者等の専門的・学術的知見を含む、包括的な保全管理の計画を策定し、整備を進めることになる。

一方で、「佐渡島の金山」をインバウンド誘致のために活用したい考えだ。新潟県は全体的にインバウンド数が少ない。冬期のスキーシーズンも訪れるエリアは限定的だ。特に冬期の佐渡島は閑散とってしまうそうだ。

「『佐渡島の金山』の世界遺産としての価値を情報発信していくことも重要ですが、観光としては近代以降の国文化財となった遺構なども合わせて活用していきたいと考えています。そこに佐渡島の自然景観、歴史、文化、伝統芸能などを含めて、どのように観光客を増やしていくか、力を入れているところです」

世界遺産のみならず、余すことなく佐渡島の魅力を知るには2、3泊の旅行が推奨とのこと。その体験をきっかけにリピーターをどう増やしていくかも検討を進めている。

最後に佐渡島の象徴でもあるトキについて伺った。

「トキの保護政策が進み、放鳥数も500羽以上になっています。今は見かける機会も増えて、私たちが驚くこともなく、それだけ日常に溶け込んできた感もあります。やはり、ここまで増えてきたのは、これまで取り組んできた皆さんの努力がようやく結実した結果だと思っています」



国史跡：北沢浮遊選鉱場。1938（昭和13）年に国策による金の大增産にあわせて建設された。1952（昭和27）年に鉱山縮小に伴い廃止



国史跡：大間港。1892（明治25）年に金銀鉱石の搬出や石炭等の搬入のために築港。堤防や護岸は「人造石（たたき）工法」によって整備された（資料提供：佐渡市）



佐渡市公式サイト
こちらからご覧いただけます。



新潟の伝統文化を継承する 小町芸妓

この人の仕事の流儀

みなとまちに今も生きる 古町芸妓のおもてなし

— 伝統を革新し、次につなぐ心意気 —

河川舟運と海運、双方の拠点港として古くから栄え、昔から多くの人・もの・文化が交わり、栄えてきたみなとまち・新潟。当時の面影を残す古町花街は、若手芸妓を継続的に輩出する貴重な生きた花街です。古町花街を盛り上げる古町芸妓のお一人、はつ柳紅子さんに、伝統を受け継ぎ次世代につなぐご苦労や心意気について伺いました。



はつ柳 紅子 さん
古町芸妓

経歴

新潟市出身。古町花街で幼少期を過ごし、古町芸妓に。芸妓養成・派遣会社「柳都振興」(同市)で経験を積み、2019年に置屋「はつ柳」を作り独立。2022年からは17人の古町芸妓が所属する新潟芸妓置屋組合の組合長も務める

新潟の古町花街^{かがい}は、東京の新橋や京都の祇園と並び日本三大花街。江戸時代から続く老舗の料亭や町屋が現存し、伝統的な木造建築が立ち並んで風情ある景観を残しています。

古町芸妓のはつ柳紅子さんは、2023年のG7関係閣僚会合で、各国要人を日本舞踊や長唄、伝統のお座敷遊びで、もてなした経験もある中堅どころの芸妓さんです。芸妓を養成し派遣する「柳都振興^{りゅうと}」から独立し、個人で置屋「はつ柳」を構えて、芸妓業の他に講演会の講師、シンポジウムのパネラーなどでもご活躍です。

「私たち古町芸妓は、日本舞踊、唄、三味線などの芸を磨き、料亭などの宴席を彩りもてなす役割を担っています。新潟では、企業での接待はもちろん、家族の祝い事などでも芸妓を招いて楽しむ文化が根付いています。外に開けたみなとまちの文化なのか、新潟の芸妓は親しみやすいと言われることが多いようで、市民の皆様にかわいがっていただいています」

北前船の往来や北洋漁業など港の活気があった明治時代には、古町芸妓は400人ほどいて、当時の警察官の数と同じくらいの数だったそうです。

時代と共に少しずつ芸妓も数を減らし、特にコロナ禍の頃はほとんど仕事がなく、非常に苦労されたそうですが、今は少しずつお客様も戻り、国内はもちろん、海外からの旅行者が訪れることも増えています。海外の大型クルーズ船やJR東日本の豪華クルーズトレイン「四季島」のツアーコースにも組み込まれ、人気になっています。



古町八番町側の東新道にある、創業1846年(弘化3年)から続く老舗料亭「鍋茶屋」。古町には元置屋など古くからの木造建築が残り、往時を忍ばせる通りになっています

衰退の危機を乗り越え 現代にあわせた変革も

江戸時代から続く古町芸妓ですが、社会の移り変わりの中で、後継者が十分育つことができず、その伝統が途絶えそうになったこともありました。そうした状況に危機感を抱いて、1987年に地元企業80社ほどが出資して株式会社組織の置屋を立ち上げたのが、柳都振興株式会社です。伝統ある新潟古町芸妓の育成、文化・芸能の伝承・発展、地域観光事業の振興を目的とし、現在は22人の芸妓が所属しています。また、古町には紅子さんのように柳都振興から独立して置屋を構え活動する芸妓が4人、さらには昔からの置屋に所属する芸妓もいらっしゃるそうです。なかでも紅さんは、古町芸妓が所属する新潟芸妓置屋組合の組合長を務めており、新潟の料亭文化、芸妓の継承に尽力されています。

「昔の花柳界では、置屋の家に生まれた方はもちろん、養女をとって小さい頃からお稽古して芸妓を育てることが多かったようですが、今ではそうはいきません。現在は、会社として芸妓を採用しています。採用条件として、年齢は18歳以上22歳未満と限定していますが、それ以外は未経験でも、また新潟生まれでなくてもかまいません。会社組織で福利厚生も明確にしていますので、安心して入社いただけると思っています。芸妓のお仕事は、当然、夜が多いのですが、クルーズ船が着いた時、お祝いの席に呼ばれる時などは、昼間が多いですね。昼夜、曜日に関わらず呼ばれることが多いので、交代で出させてもらっています」

自分の好きを見つけ、 楽しむ努力を惜しまないこと

芸妓は、見た目の華やかさに反して、お座敷での芸事披露やお客様への接客など、日々、稽古で芸を磨き精進しなくてはなりません。紅さんご自身に、芸妓さんたちはどうモチベーションを保って修行を続けられているのか伺いました。

「仕事ですから、辛いこともあって当たり前ですし、いつもモチベーション高くいられば一番良いのですが、なかなか難しい。しかし、天才は努力をする人に勝てないし、努力する人は楽しむ人には勝てないといえます。お座敷の中で、自分はこれが好きだから楽し

いというものを自分で見つけるのが大事だと、私は思っています。今日は7割楽しめた、今日は8割楽しんだと、自分で気持ちを持っていくようにしています」

ちなみに紅さんが一番好きなのは唄だそうです。三味線を弾きながら唄うのが楽しいし、ストレス解消にもなるとおっしゃいます。実は、学生時代から洋楽のハードロックを聞くのが大好きだったそうです。

しかし、厳しい修業時代とは縁遠い現代の若い世代に対して、長い修行に耐え、時に厳しい稽古事に向き合えられるよう、どんなサポートしていらっしゃるのでしょうか。

「古町芸妓の場合、18歳でお披露目となり、およそ3カ月でデビューとなります。一般企業同様、事前の訓練に長い時間をかけるわけにはいきません。最初は2曲か3曲しか踊れないので、先輩が踊っている間は見て芸を覚える、いわゆるOJTになります。花街には、先輩はもちろん、お客様にも長い目で見ていただいて、芸妓を育ててもらう文化があります。新人さんからお姐さん、ベテランの方までがいてお座敷は成り立っているのです。今日はこれができた、次はあの踊りを覚えようとがんばっている子たちを、祖父母が孫を見るように温かく見守り、育てていただいています」

厳しさの中で成長した時代より 現代ならではの新たな苦労も

昨今では、芸妓という特別な世界で、かつてのようなお客さんからの無茶な要望や理不尽な仕打ちはほとんどなくなったそうですが、今の時代ならではの大変さもあると、紅さんはいいます。

「私が新人のころは、お姐さん方が50人ぐらいいた



地元新潟の市民との距離が近いという古町芸妓。写真は新潟商工会議所の令和7年の新年祝賀会での様子です。紅さんは舞台下手(左)で鳴り物(太鼓)を担当



取材終盤では言葉だけでは芸妓の世界はわかりにくいでしょうと、3曲の唄と踊りをご披露いただきました。はつ柳紅子さんの三味線と唄、「振袖さん」のみすずさんの踊りです。古町芸妓では若手の芸妓さんを「振袖さん」と呼びます。写真は『唄 柳都新潟』から

ので、いろんな方に教わったのですが、今の子は教わる先輩が少ないので大変だと思います。また、昔はお座敷自体が大きくて、お客さんの数もお姐さんの数もとても多かった。今は、お客さん20人ぐらいの席で芸妓さんは3人しか呼べませんというケースもあって、新人とはいえ即戦力にならざるを得ません。また、昔のお客さんは厳しい方が多かったですし、お稽古でもよく叱られたりして私も怖かった。でも、今となっては本当にありがたいことで、そう言うてくださった方のほうが印象深く残っています」

伝統を大切に受け継ぎ、 どう未来へ繋いでいくか

新潟のおもてなし文化の根幹であり、伝統文化・芸能の中心的存在でもある古町芸妓にとって、今まで引き継いできた伝統をどう次世代につなぐのかは、地域全体の課題でもあります。置屋の株式会社化で、現代に合った職場環境を整備し、若手芸妓の育成やサポートをするだけでなく、地元でのイベントや体験プログラムなどの宣伝活動、また周りとの協力関係が欠かせません。

「古町にはいま昔からのお姐さんが4人、最高齢の方が84歳で、若い方が70代です。いまの若手だけになった時、新潟のためにも古町が廃れた、花柳界がダメになったといわれたくありません。私も昔からのお姐さん方がどうやって生きてきたか、どのように古町の伝統を守り伝えてきたのか何があったか、講演の中でもよく話をさせていただきますが、もう少し整理してうまく皆さんに伝えていければと思っています」

どの世界でも未来にどうつないでいくのかは、大きな課題であり、今を生きる我々の責任なのだということを改めて実感しました。

古町芸妓の唄と踊りはこちらからご覧いただけます



新潟商工会議所
新潟古町芸妓PR動画



「さのさ」新潟古町芸妓
日本舞踊・市山流



COCOTURFの挑戦

第1回

再生ヤシガラとの出会い

【背景写真：愛媛FCサンパーク練習場】



東裕

協和道路株式会社 副社長

2023年11月11日、愛媛FCは歓喜に包まれた。J3降格という屈辱を味わったサッカーチームが、2年でリーグ優勝を果たし、J2復活を成し遂げたのだ。その快進撃を陰で支えた存在のひとつが、2022年4月に完成したチーム専用の天然芝練習場である。実はこの芝、ただの天然芝ではない。舗装会社が本気で取り組み、独自に開発したオリジナル天然芝“COCOTURF（ココターフ）”だ。

協和道路の紹介

はじめまして。協和道路株式会社の東裕と申します。当社は愛媛を拠点に、大阪・高知に営業所を構える舗装会社です。高度経済成長期、全国で道路建設が進む中、私たちはいち早く「つくる」だけでなく「守る」こと、つまり維持管理に目を向けました。現在は国道2路線の維持管理をはじめ、松山空港・大阪国際空港・関西国際空港など5つの空港の土木施設維持管理業務を継続して受注しています。



地上から守る空港維持の仕事

創業者のDNAから引き継がれたもの

創業者である私の祖父は大阪生まれ。大手舗装会社に入社し、20代で愛媛へ転勤となります。当時の愛媛は、まだ舗装が十分に行き届いていない街でした。

「この街には、まだやるべき仕事がある」

そう直感した祖父は、愛媛で独立を決意します。ちなみに当時、四国には1ミリたりとも高速道路は通っていませんでした。時代の追い風もあり、創業から20年後には久万高原町で久万カントリークラブを開場。その後も海外ゴルフ場の開発・運営、造園会社、中間処理業など、多角的な事業を展開していきます。

バブル崩壊以降、公共事業は縮小の一途をたどります。現社長の代では、受け継いだ事業を見直し、整理し、合理的な経営判断を積み重ねながら、苦しい時代を乗り越えてきました。近年は、グループ各社の「得意」を掛け合わせ、新たな価値創出に取り組んでいます。その延長線上に現れたのが、“ヤシガラ”でした。

ヤシガラが運命を変えた

関連会社のEシステムは、半世紀にわたり下水汚泥を回収し、スギやヒノキの皮と混ぜて発酵させることで、パーク堆肥を製造してきました。「廃棄物を、価値ある資源へ」循環型社会を支える仕事です。2015年、高知県の土佐くろしお農協から一本の相談が舞い込みます。それは、茗荷栽培で使用したヤシガラ培地の処理についてでした。

茗荷生産日本一を誇るくろしお農協では、スリランカなどから輸入したココナッツ由来の資材、バージンヤシガラを培地として使用します。水を含ませると約3倍に膨らみ、そこに苗を植え、1年かけて茗荷を収穫。その結果、茗荷の根とヤシガラが混ざった大量の培地が毎年発生していました。私たちはこの培地を有償で引き取り、篩にかけ、根とヤシガラを分離し、熱処理することで、粉末状の“再生ヤシガラ”として生まれ変わらせました。



茗荷の根とヤシガラの培地

愛媛といえば柑橘。水はけを良くし、日光を効率よく当てるため、みかん畑は急斜面に広がっています。これまで土壌改良材を袋で担ぎ上げる作業は、生産者にとって大きな負担でした。その点、再生ヤシガラはスポンジ状で非常に軽く、保水性と排水性を兼ね備えています。この特性が評価され、愛媛最大の柑橘産地・しゅうわ農協との取引量は年々増加しています。

一方で、農業資材という枠組みでは価格に限界がありました。「この素材のポテンシャルを、もっと活かせないか？」そう考えたとき、再生ヤシガラは次なる姿へと変貌していきます。

——その先にあったのが、天然芝“COCOTURF”でした。次回は、再生ヤシガラがどのように芝生へと進化していったのか。その物語をお届けしたいと思います。



協和道路株式会社 公式サイト
こちらからご覧いただけます



表紙写真



江戸時代から日本海の重要なみなとまちとして栄えた新潟は、まちの至るところに様々な「顔」を持つ。そして、時代の変遷とともに現在も新たな「顔」が生まれ、訪れる人々を魅了し続ける

編集後記

今回は、「みなとまち新潟」を中心とした特集です。土砂の堆積問題等を抱えながら発展してきた新潟港。その「みなとまち新潟」と深く関係する「日本酒王国」新潟の文化と挑戦。困難の末、世界遺産に登録された「佐渡島の金山」。佐渡島と本州を結ぶ生命線ともいえる航路を維持し続ける佐渡汽船様の取り組みなど非常に興味深く感じました。

また、取材中「和らぎ水」という言葉をお聞きしました。「和らぎ水」とは、日本酒を飲みながら合間に飲む水のことです。水を飲むことで、酔いがゆるやかになり体に優しく口直しの効果等もあるそうです。本誌も情報発信とあわせて皆様の「和らぎ水」になれたらと思っています。

なお、今回からQRコードで各コーナーの内容と関連のあるホームページ等についてご紹介しています。是非、ご利用いただければと思います。末尾ながら、取材等にご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。



発行

一般財団法人 港湾空港総合技術センター

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-3-1 尚友会館3F

TEL 03-3503-2081(代表) FAX 03-5512-7515

URL <http://www.scopenet.or.jp> 公式サイトはこちらからご覧いただけます

